

17 世紀イングランド常備軍論争 6

藤原 浩一

A B R I E F  
R E P L Y  
T O T H E  
H I S T O R Y  
O F  
Standing Armies  
In *E N G L A N D*.

With some Account of the Authors.

---

L O N D O N :  
Printed in the Year 1698.

『イングランドにおける常備軍の歴史』<sup>1</sup>に対する手短な返答、および著者について<sup>2</sup>  
ロンドン：1698年印刷

## 序文

世の中のあらゆる時代において、また最良の政府のもとでも、いつも誰かの成功に対する羨望か、野心、虚栄心、もしくは個人的目的からか、ことあるごとに不満をあらわにし、自分たちの統治者の行為を笑いものにし、痛烈に批判する人々がいた。歴史はこの種の例で溢れており、私が相手にしている紳士方がそのようなことは知らないなどと想像することは彼らに対する侮辱となるだろう。

我々の時代では、ニックネームで呼ぶことがひどく流行しているので、彼らをぶつぶつ言う人、不平家、などのようなものと呼ぶ。そのような人々にあながち不適切とも言えない言葉がある詩人が投げかけている。

そしてたとえ神イエスが統治されようとも彼らはまた不平を言うだろう。

これは常備軍の歴史について、これら政府に反対する人々、世の中の不満分子などの話で世間の関心をひいてきたこれらの人々に対する返答としてもあながち的はずれとはならないだろう。彼らはいつも行政官をしかめ面でみつめ、上役の小指のように叫び声をあげる。しかし、ここでは彼らの一般的な性格について詳しく述べる余地はない。ただ次のことだけは述べておく必要がある。すなわちこのような類の人々には、自分たちの性質と目的の両方に、本質的で主要な支柱として分離できない付属物がある。彼らは常にギャーギャーとわめき騒ぎ、おののき、そして悲しいニュースで世間を怯えさせる。宗教や自由、もしくは双方とも彼らの集団の確実な旗印である。そして彼らの帽子にはリボンがついていないだろうか。ローマカトリック反対、奴隷制度反対、常備軍反対、大蔵卿反対、など。

この事件や、自分たち独自の方法で論じた著者の裏側を吟味すれば、栄誉ある地位への道は彼らが常に反対者の名簿に名を連ねることになる。そして自由を求めてこれほどまでに精力的に書物を著されたこれらの紳士方がそのようなことをされるとは言わないまでも、そうした人物を我々に明確に示している。彼らはストラフォード卿<sup>3</sup>、およびノイ卿<sup>4</sup>であり、私は他にも何人かの名前をあげることができる。栄誉ある地位への道として、チャールズ一世<sup>5</sup>が下院で、国王に反対意見を述べさせる慣習を始めた、と彼らは言う。それはどうなったか。実際に、彼らが金目当てであることに国王が気づき、彼らの発言を

止めようと騒ぎ立てた。それ以後、これが目に余る方法となったことは疑いがない。

宮廷で議会のののしり、  
そのおかげでだちに荣誉ある地位を手に入れる。

しかしそれがどのように広まったのか。個人的な目的がそのような不平の裏側に広く存在しているので、我々はその提案に反対する証拠と気づくことはなかった。

他方、私はここで、重要な人物の数え切れないほどの例を挙げることが出来る。宮廷の恩寵を受けている人々が自分たちの期待を裏切られ、宮廷が自分たちの功績に報いていないと思うとすぐに民衆に寝返り、国民の自由を扇動し、宮廷の批判者となる。私はこのことによって、S——卿、D——卿や H——氏、H——氏など<sup>6</sup> の特定の人物をさしているわけではない。ぴったり合う人に当てはめればよい。

この不満という悪霊はこの最高の治世で、いままでにイングランドが経験したこともないような穏健な政府のもとで駆けずり回っている。単独の著者とか個人によってではなく、とりわけ誤解した政治家のクラブ全体によるこのような出版物の議論で政府が悩まされている。彼らはこの治世でなければどの治世においても当然の扱いを受けたであろう。

もしこの国の最高の人々のそのような陰謀が、疑いなく誰しもが真のイングランド女王と認め、比類無き思慮を持って国家を統治された、エリザベス女王の治世に企てられたなら、彼らはきわめて厳しく扱われたであろう。しかし彼らには、ほとんど何でもしゃべらせてもらえる完全な自由が与えられ、本当に彼らは度を過ぎており、下品で、不作法でさえある。というのは、彼らは国王自身を嘲り、からかい、そして国王陛下に対して滑稽な賛辞をおくり、きわめて下品な悪口を投げかけているのだ。

これはあまりにも下品な書き方なので、彼らと同じような下品な返事はせず、彼らを紳士らしく扱いたいし、彼らが紳士的に振る舞うか振る舞わないかは、彼らに任せたい。

# (1)

## 常備軍の歴史に対する手短な回答。

イングランドにおける軍隊に反対する抗議はきわめて独断的に実行されているので、不平を述べている人へ何を言っても効果があるとは思えない。彼らは自説を主張しつづけており、自分たちに対する発言や、傾聴に値する意見に対して耳をかそうともしない。というのは、軍隊が我々の破滅となるに違いない、ということの真偽を公平に論じるのではな

く、政府に対して疑念を抱かせることが彼らの目的であると思われるからである。

私は彼らの要求にしたがって彼らの以前の著作を注意深く調べてみた。そしてこの中で彼らに対するいくつかの返答をさせて頂いている。それらのいくつかは彼らにとって大いに重要であると思うが、彼らはほとんど意味がなく、注目に値するとは考えておられない。

彼らは『常備軍の歴史』と呼ぶものを世間に発表しているが、その中でいくつかの誤り、省略、そして矛盾を犯している。そして歴史的な部分はその趣旨には全く無関係なので省略されても構わないが、以下の事柄は彼らに告げておいた方がきわめて適切と思われる。

## (2)

まず始めに、彼らが「常備軍」と呼ぶ九千人のスペイン軍がネーデルラント十七州で何かに成功を収めた、ということは誤りである。そしてもし彼らがストラダ<sup>7</sup>とベンティポリオ<sup>8</sup>をそれらの著者として再検討すれば、アルバ公爵<sup>9</sup>とドン・ルイス・ド・レケセンス<sup>10</sup>はフローニンゲン<sup>11</sup> 近くの戦いではナッソーのルートヴィヒ<sup>12</sup> に対して、またハールレム<sup>13</sup> とモンズ<sup>14</sup> の包囲においても非常な大軍を投入していたことが分かるだろう。アルバ公爵は最初に一万四千の兵を従えており、また別のモンズ包囲戦においてはさらに二万四千人を召集した。そしてエフモント伯爵<sup>15</sup> が外国軍に対抗するために援軍を要請したときには、スペイン軍はその国の軍隊の他に三万人の傭兵を雇っていると彼らは主張した。

他の軍隊に関しては、強大なメキシコやペルーを少数の軍隊で征服したスペイン軍の例を著者が引き合いに出していないことを疑問に思う。彼らのすべての作戦において騎兵八百と歩兵五千七百五十以上を従えていたなどとは読んだことがない。

軍隊は、他のものと同様に、その割合で大軍にも寡兵にもなる。そしてリチャード二世<sup>16</sup> に召集された四千人のチェシャーの弓兵は、主人の破滅を導いただけであったが、実際には現在の武装した二万人以上に威嚇的な軍隊であった。

## (3)

著者らは（彼らの名前は「軍団」だと聞いているので）歴史をメアリー女王<sup>17</sup>までさかのぼり、そこで突然、常備軍は当時、千二百人であり、エリザベス女王の時代には三千五百人であったと我々に告げる。ついでながら、そこで注目に値することだが、イングランドにおいて過去百四十年間以上も常備軍を維持することが容認されていたと彼らは認めている。というのは我々が問題にしているのは人数ではなく、「常備軍」の存在そのものだからである。そして彼らは以前のパンフレットでいかなる常備軍も我が国の政体にとって破壊的な存在であり、イングランドの自由とは一致しないとしばしば主張してきた。それでも我が国の政体はエリザベス女王<sup>18</sup>の時代でも非常にうまく成り立っていた。——また、これらの紳士方は自分たちの引用文も忠実には引用していない。というのはまず初めにメアリー女王は常備軍が千二百人だけだったので、カレー<sup>19</sup>を救出するには兵力不足であり、恥ずかしくもカレーをフランスへ奪われてしまったことを無知でない彼らは知っている。実際、女王が市民軍を召集していたら、彼らはフランス軍をドーバーへ上陸させなかったであろう。しかし彼女が一万人の傭兵を用意していたら、以前から長期間我が国の領土であったカレーを今でも維持していただろう。もしそうであれば、ダンケルク<sup>20</sup>を失うことは我が国にとってそれほどまで不利にはならなかったであろう。それからエリザベス女王については、彼らは女王がいつもネーデルラントに非常に素晴らしい軍隊を維持していたことを省略している。ネーデルラントは女王にとっては兵士の養成所であった。そして女王が侵略されることを恐れていたとき、自国の防衛のためにどれくらいの兵士を本国へ輸送したのかを問いたい。というのは女王が用意した軍隊は、ティルベリ<sup>21</sup>の野営地に四万四千人、そしてプリマス<sup>22</sup>に二万人であったが、全員が市民軍であったわけではなく、アイルランドやネーデルラントでの実戦経験のある兵士であった。

## (4)

エリザベス女王の業績だと著者が述べていること、そして女王がどのような栄光のもとで統治し、死去したとき、どのように我々のもとを去ったかは、すべて真実であり、それ以上のものがある。そして女王の収入額や税収額などは、我々が知る限り、正しいであろう。しかしこれらの紳士方が女王にどれだけ多くの収入があったかとか、女王の偉大な業績がすべてまるでその収入のおかげであるなどと主張するとき、彼らは事態をひどく誤り伝えていると言わせて頂かなければならない。女王にどのような税収があり、スペイン人から西インド諸島やカディス<sup>23</sup>および海上でどのような方法で、何回かにわたって

6千万エイト<sup>24</sup>以上も奪い取ったかを述べるべきである。それらは都市からの補助金や関税、ネーデルラント人が女王に支払った利子などと合計すると莫大な額になる。そしてこの資金で女王はすべての偉大な業績を達成し、つねに兵力を維持し、和平条約を結んだ後も残したのだ。同様にジェームズ一世<sup>25</sup>はブリーレ<sup>26</sup>、ラッメケンス<sup>27</sup>およびフリッシンゲン<sup>28</sup>における守備隊にネーデルラント人が支払いを拒絶したとき、食糧不足のためそのうち三千人を餓死させ、置き去りにした。

私はジェームズ一世、チャールズ一世、もしくはその息子たちの歴史には踏み込まない。歴史的な部分は、要点についての私の理解ではこの場合どちらの方向にも議論とならない。我々の直面している問題は今までがどうであったか、なかったかというよりも、今何をするかが求められているかである。そして私はこれらの紳士方が穏やかな議論を認められることを望む。その場合、まず第一に何らかの常備軍が絶対に必要であり、議会の同意のもとでの常備軍は違法ではないと証明させて頂きたい。

(5)

私は、先の議論に対するある返答がこの件の歴史的な部分に言及し、イングランドのあらゆる政府が長年の間なんらかの常備軍を維持していたということを証明しようとしたことを覚えている。その内容はあまりにも明白であり、否定できないものである。

それから彼らはジェームズ一世の治世について吟味し、続けてチャールズ一世の治世について調べ、彼らが軍隊を持たなかったことを認めたが、それでも彼らがおかしたあらゆる暴政と圧政を並べ立てた。どのようにして彼らが国家を隷属させ、議회를軽視し、臣民を抑圧し、課税したか。それもすべて常備軍を持たずに。いや、そればかりでなくチャールズ一世は議회를侮辱したとき、これらの著者が言うように、彼は喜んで居酒屋や、賭博場、売春宿などをくまなく搜索し、三、四百人をかき集めた。それがもし事実なら、信じるに値しないとは思いますが、それでも彼は軍隊を持てなかったこと、護衛兵さえも持てなかったことは明白である。さて、もしこれらすべてが軍隊を持たない国王によってなされたなら、軍隊を持っている場合にこれ以上のことが出来ないはどうして言えようか。不幸は軍隊にあるのではなく、暴君にある。

著者らによればチャールズ一世は自分を支える軍隊を持たなかったので、彼の暴政は不安定で、最後には破滅したと結論づけている。それでは彼の息子<sup>29</sup>については同じこと

が言えないのだろうか。強大な軍隊を持ち、それまでのイングランドの軍隊と同様に傭兵の軍隊であった。彼は自分を支える軍隊がありながら、彼の暴政は不安定で最後には彼の破滅を招いた。暴政はイングランドにこれまで生い茂ることのなかった雑草であり、常に植えつけた人々を毒してきた。そして軍隊が存在していても、いなくても同じ事である。

(6)

これらの紳士方は忠実な歴史家ではないことを世間の皆様にお知らせするために少しだけ触れておきたい。彼らは事実を公正に述べるのではなく、ただ自分たちの目的に反するというだけで現実の事実を省略している。それは公平な議論とは言えない。

しかしもしこの件を議論しなければならないとすれば、私は二つの題目に限定することが最適だと思う。

まず初めに、平時における常備軍は合法たりえないのか。

次に、それは役に立たないのか。

最初の問いに対しては、以前出版された『常備軍は自由な政府とは矛盾しないことを示す論』<sup>30</sup>という短いパンフレットで実際に証明されている。これらの紳士方はこれに返答することが適切だとは全くお考えではないようだ。そして今無言のうちに事実であると認めておられながら、それにもかかわらず危険であると言われている。しかしながら、もし常備軍が合法的なものなら、我が国の自由と政体を破壊するものだという考えは真実たり得ない。というのは合法的なものが我が国の政体を破壊することは決してあり得ないからである。それは常備軍を合法的なものでありながら、また同時に不法なものとするようになる。

常備軍は議会の同意があれば合法的な軍隊である。そしてもし立法府が軍隊を設立するのならば、企業にとっての勅許状と同様に軍隊にとっての立派な免許状となる。というのはこれらの紳士諸君は、議会によって設立され、違法となり得ない軍隊の他にどのようなものを指しておられるのか。貴族院の破産者や、下院の年金受給者、お世辞ばかりの聖職者、売春的な内閣などの肩書きは有毒な語句であり、そして情熱と不作法のどちらも好む。現在そのようなものはなく、今までにもなかったと私は確信しているし、今後もないことを希望している。

(7)

それでもなお、たとえ彼らがそうであったとしても、彼らはイングランドの議会である。そして彼らの行為は王国全体の行為であり、違法とはなりえない。

私は著者らが認めており、否定できないことを証明するために時間を費やすつもりもない。したがって私は第一の主題は以前に証明されたものとして、また我々の敵対者によって認められたものとしてそのままにしておく。

つまり、議会の同意を得た平時における常備軍は自由な政府と矛盾しないし、合法的な軍隊である。

二番目の主要な議論は、それが必要かどうかである。合法的なものが常に適切なものとは言えないからである。我々が告げられているように、軍隊によってさらされることになる危険を冒すほどの必要性があるかどうか。

これほどまで莫大な血と財物を犠牲にして購った平和を維持するために適した態勢を常に取らなければならない非常に重要な理由があることには議論の余地はないと思う。軍隊を維持すべきか、否かについてはこれからの議論である。軍隊のおかげでこの講和を獲得できたことは認めてもらいたい。そして我が国が強国であると思われなかったら、講和条件はこれほど恵まれたものにはならなかっただろう。またルイ十四世<sup>31</sup>はあれほどまで広大な諸国や、難攻不落の要塞や、君主の称号を手放さなかっただろう。我が軍は同盟軍と共に神の加護のもとにこの講和を獲得した。さて、話し合いでこのリヨン<sup>32</sup>を手放し、フランス王の名誉だけに頼って条約を守らせることが適切だろうか。彼は以前、同様な場合に、名誉には大した価値を認めなかった。我が国の軍隊を解散し、同盟国に頼るべきか。これは率直な質問である。

(8)

もしもフランス王がそれほど信頼できるなら、スペインや神聖ローマ皇帝は強力なブライザハ<sup>33</sup>、フライブルグ<sup>34</sup>、フィリップスブルグ<sup>35</sup>、モンス、アト<sup>36</sup>、ルクセンブルグ<sup>37</sup>、シャルルロワ<sup>38</sup>などのような都市に対してこれほどまで強力に全力を注ぐ必要は無かった。これらの都市は莫大な維持費がかかり、彼らにとっては実際の利益はなかった。そし



てフランス王は喜んでフランシュコント<sup>39</sup>、ブルゴーニュ<sup>40</sup> および広大な領域を大きな収入と利益とともに、それらの代わりに断念しただろう。しかしこれらの都市は講和の誓約として与えられた。そして莫大な費用をかけて同盟国によって維持される。したがって同盟国側は自分たちの条件をフランス王に実行させるほど十分な力を持っているのだろう。

私はこれらの紳士方が今、どれほど大きな安全保証でいい気になっておられるのかはわからないが、私にとって世の中で最も滑稽な事柄は世界中の国々が金を払って軍隊を維持しているようなときに完全に武装を解除することである。

私は喜んでこのクラブの紳士諸君が望むだけ、議論の幅を認めよう。そして、それゆえにフランス王が引き渡す取り決めになっていたすべての占領した都市と国々を、現実にはフランス王はそんなことは実行していないが、仮に引き渡すとしよう。また、ジェイムズ二世は実際にはその権力も人物も全く脅威でもなく、この場合には言及する価値もない。またスペイン王<sup>41</sup>は死んでもいないし、死にそうにもない。さらに、これらは常備軍のための議論ではないし、今までそうであったこともなく、少なくとも単独で考慮されたこともない。

(9)

しかしこれらすべてにもかかわらず、実力のある何らかの常備軍は、国家がきわめて高価な代償を支払って獲得した講和を維持するために絶対に必要である。そして運に任せ、この不確実性に我々の身をさらすことはきわめて説明困難で論拠薄弱なものに思える。誘惑が盗人を生むと言われている。我が国が無防備で無力であれば、この講和を不安定なものにし、フランス人が講和を破棄する気になるものはこれ以外にはない。

国内の軍隊は危険だとしても、まったく逆に軍隊を持たないことは海外では致命的にちがいない。軍隊の危険性は不確実であり、まったく危険がないかも知れないが、正反対での損害は確実である。以前我が国がフランスを占領し、すべてのフランスの愚か者は死んでしまったので、それほどまで心配をして恐れることはないと言っているわけではない。フランスは現在、イングランドを除けば、ヨーロッパのいかなる単一国家よりも強大であり、フランスを一定地域内にとどめておくための唯一の方法は連合と攻撃的な同盟である。これは協力する態勢の整った軍隊がなければどのようにして維持できるだろうか。私にとっては理解できない不可解な謎である。実際に国王は同盟国に語られることになるで

あろう。「ほんとうに我が臣下は私に軍隊を持たせない、それゆえに我が国は資金で分担せざるをえない。」しかし他の国々も我が国と同様に軍隊を維持し続けることは拒絶するかも知れないが、そうなれば同盟は実質的にはきわめて効果のあがらないものになるだろう。これらのことは以前に示されたし、より適切な言葉を使って述べられた。そして我々が議論している相手の紳士諸君はそれらについて語ることは忘れたほうが好都合だと考えておられるようだ。

(10)

しかし今、我々は艦隊と市民軍についてからかわれており、これらは返答されるべき常備軍に対するすべての虚偽の申し立てに相当するものである。実際に秩序ある艦隊は素晴らしいものである。そしてよく訓練された、このあまり知られていない黒鳥といえる市民軍もまた、もし手に入れば、立派なものになるだろう。しかし、紳士諸君、あなた方と同様に世の中の出来事を何人かの人々に理解させて頂きたい。この艦隊と市民軍が、あなた方が主張されるすべてであれば、フランドル<sup>42</sup>での戦争ではどのような役割を果たせるのか。我々にとって非常に関心のあることはフランドルで戦争を行うことである。そこでの強力な都市による防壁はフランスに対する世界中で最善の防衛手段である。いまフランス王が八万人の軍隊で大嵐のように、1672年に彼がしたように宣戦布告もせず、それらの諸国に襲いかかったとすれば、市民軍は国王とともに同盟国救援のために海を渡るのか。それとも我が艦隊がシャルルロワを救うことができるのか。あなたが言われるように国王チャールズが行ったように四十日で軍隊を迅速に召集することは可能なのか。これらのことが考慮する価値がないとは奇異なことである。なぜフランス王は軍隊を維持し続けているのか。それは恐怖のためではなく、彼の栄光を増すためである。そしてまさにその理由の故に、我が国が無防備のままにいることは非常識なことである。

(11)

イングランドはいつも時代と手を携えてきた。そして近隣諸国と同様に武装したり、非武装であったし、いつもそうしなければならなかった。我が国が国内で軍隊を維持していなかったときは、海外でも近隣諸国は軍隊を維持しておらず、さらにその必要もなかった。我が国は近隣諸国と同様に備えをしていた。しかし今、近隣諸国がみな強大な軍隊を持つ状況で、我が国は確実に危険にさらされてしまう無防備でいるべきなのか。

軍隊は速やかに召集できると主張されている。チャールズ二世は四十日で軍隊を召集

し、現在の国王はきわめて迅速に召集された。これらの紳士方に調査して頂くように要求する。それらの軍隊をどのようにして運んだのか。私は彼ら両方を見た。彼らは今までに見たことのないほど愉快で、勇敢な若者達であった。しかし訓練も受けず、艱難辛苦には慣れてもいず、前者の軍隊はフランドルにとどまり、マラリア熱や下痢という、まさしく最初の戦闘で朽ち果てた。そして後者の軍隊はダンドーク<sup>43</sup>で同様な目にあった。イングランド人のどの軍隊も海外に出て軍務で鍛えられるまではいつもうまくやっていけるだろう。我が国民の性質を知っている人に訴えたい。イングランド国民は世界で最悪の未熟な人々であり、それを克服した時には最高の人間になる。

しかし要点に戻ろう。もし我が国の平和を守り、絆と防御となる同盟国と連合を維持するために必要なら、敵からの攻撃を防ぐためにいつも準備をしておくことが必要ではないか。我々イングランドの軍事力の評判を維持するためにも必要ではないか。そうであれば国内において自国民を守るためだけの態勢ではなく、海外で同盟国を守り、敵からの突然の攻撃に対する支援が必要となるだろう。そしてこれは艦隊や、市民軍では不可能である。

(12)

しかしさらにこの論を進めると、我が国は艦隊を所有していたにもかかわらずイングランドは侵入され、また繰り返し侵入されている。ヘンリー七世<sup>44</sup>はリチャード三世<sup>45</sup>が艦隊を率いていたにもかかわらず軍隊とともに上陸した。モンマス公<sup>46</sup>はジェイムズ二世が立派な艦隊を持っていたにもかかわらず、イングランド西部に上陸した。そしてジェイムズ二世の常備軍は二千人に過ぎなかったが、そこで敵軍を大敗させることができなかったとすれば、すべての人々に判断して頂きたい。市民軍は彼に対して何ができたのであろうか。いま仮にモンマス公がフランス人だったとすれば、または他のどの国でもよいが、彼は上陸し、我が国に侵入する時間があったことになり、武器を荷下ろしして、再び船団を送り返し、その間、全く我が艦隊によって阻まれることもなかったということになるかも知れない。さらに、もし彼が五千人の正規兵を従えていたら、ジェイムズ二世をその王国から追い出していただろう。繰り返しになるが、彼の部下が訓練もろくに受けていない、単なる市民軍であれば、その結果がどうなったかわかるだろう。言っておかなければならないが、たとえ彼らが我が国の他の市民軍よりもはるかに優秀であったとしても、彼らはその四分の一の数の正規軍に敗北するだろう。

さらに我が国には艦隊があったにもかかわらず、オレンジ公<sup>47</sup>は指揮下の全軍を迅速に上陸させ、十分な時間を得て全艦隊を送り返すことができた。したがって艦隊があれば

我が国が侵略されることはないという考えは誤りである。我が国には立派な艦隊があったにもかかわらず侵略されたのである。そして私はうぬぼれではなく、あなた方が近隣諸国の港を封鎖出来る艦隊を持たない限り、艦隊に対する何の脅威もなく海を越えて、彼らはどの地点からでもイングランドに侵入を試みるだろう。だからどこであれ船を艀装して送り出そうとする動きを耳にすれば、エリザベス女王がフランスのアンリ四世<sup>48</sup>に対して行動したように艦隊を派遣し、彼らの動きを止めなさい。

(13)

今、もし私が艦隊の存在にもかかわらず、安全に海岸に到着できたとして、市民軍以外に私に対抗する軍隊が無ければ、私は理解力のある軍人に問いたいのだが、この国全体を征服するために何名ぐらいの兵士が必要だろうか。実際には、強大な軍隊は不要だろう。というのはおそらく、我が国で最上の四万人の市民軍でも訓練された軍隊の応援がない限り、実戦経験のある八千人の兵士には対抗できないだろう。アイルランドのエニスキレン<sup>49</sup>の人々の場合はここでは当てはまらないだろう。というのは、一つには彼らは自分たちの家族や財産を破滅させられて絶望した人々であり、この上なく怒り狂っていた。そして武力以外には自分たちの生命を守る手段が無かったのである。そしてもう一つは、アイルランド人は世界で一番卑劣でみっともない連中である。すなわち彼らはマスケット銃を目を閉じて撃ち、そして左手と区別するために右手のまわりにひもを結びつけるような連中である。これらは情けない例であり、我々が以前から知っていたように、市民軍は常に子供達や愚か者を相手にするときだけ勇敢な兵士となることを証明するだけである。しかし、我々の市民軍はオレンジ公ウィリアムの歴戦の勇士を本気で阻止しようとする気持ちがあったとしても何が出来ただろうか。現実にはジェームズ二世と同様にただ逃走しただけである。

市民軍を有効利用する計画は大いに語られてきたし、その目的で一冊の本が出版されている。それが実行可能であればよい計画だっただろう。しかし賢人であれば誰もそのようなことは決して試みなかったであろう。なぜなら賢人は不可能なことはしないからである。戦争はもはや思いがけない出来事ではなく、熟練を要する仕事であり、それに関与する人々は長い見習い期間を経験する必要がある。人間の機知と勤勉さが戦争を高度な完成域に高めており、管理運用しなければならないほど大きく発達しており、全体を運用する人々を必要としている。戦争は今や福音書のようなものであり、人間はそれぞれに分担させるべきものである。このクラブの紳士諸君は好き勝手に、イングランド人の生まれつきの勇敢さについて立派なことを述べておられるが、彼らに言うておかなければならない。

軍人の資格として勇氣は以前より価値が下がっている。勇氣も必要だが、運用が戦争の技術の基本原理となっている。この一例としてはアイルランドの例を引けば十分だろう。アイルランド人がなんと惨めな戦争をしたか誰でも知っている。現在、アイルランド人が勇氣に欠けていないことは明瞭である。というのはまさに同じ人間が十分な訓練を受けて、海外へ派遣されたとき、厳格な規律のもとでピエモン<sup>50</sup>やハンガリーで彼らがどれだけ勇敢に振る舞ったかをみれば、彼らがどの軍隊にも劣らないほど立派な軍隊であることが認められる。

(14)

そしてもし事情が変化すれば、我々も自分たちの態勢を変えなくてはならない。そうすれば『常備軍の歴史』はどうなるのだろうか。今までは世界に決して存在しなかったとしても、いまや我々の安全は常備軍がなければ守れないほど彼らは絶対に必要である。

今度は国内における常備軍の危険について少しばかり吟味してみなければならない。そうすることで、このクラブの紳士方が、あたかも一つの車輪だけですべてを運ぶかのように、政府のすべての流れを一つの方向に変え、国王と大臣の全体の計画が専制的な権力を獲得し、軍隊によって統治するためのものだと言主張するとき、彼らの考えが正しいかどうか分かるでしょう。

(15)

彼らは実際に時には大げさな賛辞で国王の機嫌をとっている。しかし、一方で彼らは英語で表現可能な限りの言葉であからさまに、「彼はイングランドに来る前から、すでに軍隊による統治を計画していた。それゆえに宣言において軍隊を解散する約束を省略したのだ」と発言している。これらの紳士方の主張は決して役立つないので冷やかしは止めて頂きたい。ドライデン<sup>51</sup>が述べているように、

論争する人にとって、道理が引込むと  
確実に頼れる手段は罵りだけになる。

しかし、我々は彼らを同じ方法で扱うつもりはない。宮廷の（常備軍について）すべてのの巧妙な策略が真実であると考えたわけにはいかない。そのうちのいくつかは明白な偽造である。「我々に告げるために議会は、戦争の一部を海で首尾良く成し遂げられるかもし

れない、と考えた。また議会の権威という言葉は権利の宣言の常備軍に関する条項に記載するように、常備軍を早くから標的としていた人々によって強く主張された。さらにアイルランド王国は無視され、ロンドンデリー<sup>52</sup>は救援されなかった。またより強大な軍隊の計画をでっち上げることが可能となるように。」これらは実に恐ろしい思いつきであり、意地悪な人だけに受け入れられるものである。そしてもし私に調査する時間があれば、アイルランド平定のために軍隊が必要だという優れた認識を国王と同様に議会も持っており、そのための歳出を認めることに積極的であったとこれらの紳士諸君に証明することはとても容易であろう。国王が二万人の軍隊を持たずに平定を試みることは望ましくないと議会で演説されたとき、もしこれらの紳士諸君が誰が国王陛下にそのような発言を助言したのかと尋ねられたなら、ショーンバーグ公爵<sup>53</sup>自身であるとお返事されただろう。彼は立派な軍人であり、軍隊の指揮官の中で最も正直で、彼と同年代の誰よりも経験豊かな将軍であった。彼を軽蔑すればその判断を非難されずにはおれない。彼は王国や軍隊を打ち破ることに慣れている人物であったが、ダンドークで戦うことは非常に危険だと考えた。我々は彼の用心深さで国家全体を救う行為を目にした。何千もの生命が失われたことによって、愚かにも彼に勇気が欠けていたからだとは非難し、それでボイン<sup>54</sup>で戦死したのだと思ったものもある。ジェームズ二世はアイルランドに五万人の軍隊を持っており、将軍以外必要なものはすべてそろっていた。そして二万人以下の軍隊で彼らの鎮圧を試みることは軍隊を手に入れるための口実であるとは誰でも言えよう。

(16)

これは意味をねじ曲げるやりかたであり、(反省もなく)我々の敵対者がとても得意とする方法である。しかしその方法は、ソッツィーニ派<sup>55</sup>の原理では有効であっても、政治においてはそれほどでもない。

これにより、私は紳士方に、以下のことがきわめて明瞭だと述べさせて頂かなければならない。すなわち彼らは自分たちがひどく熱心に唱えている自由ではなく、むしろ現在の確立されたものを中傷することに熱心なのである。

(17)

私が次に見いだした矛盾は23頁である。そこで、狡猾な論争者らしく、議論において自分たち自身を傷つけないように、断言してはおられないが、それでも彼らは明白に、我が艦隊の省略はすべて、我々にとって艦隊は何の保証にもならないという主張をそこから



生み出すために計画されたものだと示している。あたかも国王陛下や大臣が我が国の艦隊に注目に値することは何もするなど、また「我が国の艦隊は我々にとっては何の保証にもならない」と議会で発言させるために何百万ポンドもの資金を六、七年の間浪費するようにと命令しているかのように。これはきわめて重大なことであり、私は見逃すわけにはいかない。国王陛下は逆に、以前のどの国王よりも我が艦隊と商船のより一層の改善をされたか、否か、をこれらの紳士諸君に調査するように要求する。国王陛下がどの前任者よりも多くの船舶を建造し、自分自身の特別の方法で、よりよい船舶を建造されなかったかどうか。ドック、造船所、倉庫、船員、船などはイングランドの歴史上最高の条件にあるのではないだろうか。国王陛下の議会でのすべての演説において、彼らに提示された海軍の状況について最大限、海軍の偉大さを示されなかっただろうか。海軍と船舶用品がこれまで実現されたことのなかったほど国王陛下によって整備されなかっただろうか。また、戦争の終わった今、世界最大で、最善の行動態勢を艦隊に保たせるように心を配られなかっただろうか。そしてこれらすべては艦隊があっても我々にとっては安全ではないと知らせるためだったのだろうか。これらの紳士諸君がこのように論理を飛躍させて主張し、国王陛下がとられた安全保障策や、敵国の心配の程度と同程度に我々が満足すべき事柄をけなすとき、私は恥ずかしくさえ思う。

## (18)

そのうえ、私は国王陛下、もしくは大臣も演説や談話において良質の艦隊の価値を低めようと提案されたことがあるだろうか。もしそうなら、どのような目的で彼らはそれほど艦隊を大切にし、そのために人々を確保する登録令があり、そして彼らを励ますためにグリニッジ病院に王の基金があるのだろうか。なぜこれほどまで多くの奨励金が船員へ与えられたのだろうか。そしてきわめて膨大な資材が彼らを増員し、継続するために蓄えられているのだろうか。

我々は物事を区別する必要があるのではないだろうか。我が国の防衛は二種類あり、我が国の力も二種類なければならないだろう。我々の艦隊は否定しがたい防衛力であり、我々に対する保証である。そしてそうであろうとなかろうと、彼らがひどく好む艦隊と、我が市民軍は、彼らが望むように国内においては大いなる保証になるだろう。しかし、どちらもフランドルでは何の役にも立たないことは明白で、否定は出来ない。戦争が始まればそこが戦場となることを誰でも認めるでしょう。我が国は資金面で援助すればよいということは、無意味である。というのは資金と同様に人間が不足しているからである。そしてまたこの戦争では異常なまで高い割合でそうであり、そうであった。

(19)

これらの主張はもし出版社がそれを望むなら著者のものと同様に、十二ペンスの本までにも拡大できるだろう。しかし実際には短いので、彼らを合理的に論破することはできない。

このように軍隊に反対であると主張するこれらの紳士諸君はある方法を主張するためにそれらを取りあげた。戦時にフィナーレ<sup>56</sup>から軍隊を運んで来てスペインを援助する方法を。我々が問い詰めなければ我々に知らせもせず、それらの軍隊はツーロン<sup>57</sup>から出航しなければならないし、我々はその目的のため海峡に強大な艦隊を配置しなければならない。そうしなければ彼らは先手を打たれてしまうだろう。いや、それらの軍隊がフィナーレへどちらの方向からやってくるのか問いただすこともなく、サヴォイ公<sup>58</sup>がモンフェラート<sup>59</sup>を占有しており、フランス軍に対して北部イタリアすべてを領有している。もし彼らが戦争を導くのと同様に議論がうまくないのなら、また彼らの論理が地理の知識に勝らないのなら、彼らの議論も同様にお粗末なものにしかならないだろう。

しかし、彼らはそのようなことは理解できると思われるので、私は喜んでこれらの紳士諸君にお尋ねしたい。もしカトリック教徒とプロテスタントとの間で戦争が突然この神聖ローマ帝国で生じたら、預言力のない人間でさえもきわめて起こりそうなことだと言えようが、これらの紳士諸君はプファルツ<sup>60</sup>のプロテスタントをどのような方法で国王に援助してもらいたいのだろうか。我が艦隊と市民軍はこの場合どのような軍務に参加できるのだろうか。これらの紳士諸君は、そのような場合には資金援助が出来ると言われる。ジェームズ一世も自身の娘が世襲財産を失いかけているときに<sup>61</sup>、きわめて情けない態度で同じことを言われた。そしてドイツにおけるプロテスタントの勢力は、グスタフ・アドルフ<sup>62</sup>の時代以来、以前より一層困難な状況にあるが、同盟と連合によって支援しなければならない。その同盟を我が国王陛下が結成されなければならず、我が国の軍隊が支えなければならない。それが出来なければ、そもそも支援が可能かどうかという大問題になる。

(20)

これらの紳士諸君はイングランド国内のことだけに限定して考えておられるようだが、イングランドの問題はいくつかの役割で考慮しなければならない。今回、イングランド国内だけを考えれば、二つの同盟の盟主であり、両方とも我が国の繁栄を維持するために本質的に必要なものである。一方は所有権の同盟であり、他方は宗教の同盟である。一方は



フランスの奴隷制度に反対し、他方はドイツのカトリック教徒に対抗している。そして我々に一定の軍事力がなければどちらも維持することが出来ない。これらの紳士諸君に言えることだが、彼らが我々の自由を守るために武装を解除させたいとしながら、彼らは我が国の宗教に致命的な打撃を加える。実を言うと彼らが宗教の価値など認めているなどとは思えない。なぜなら彼らの原理は無宗教であり、不敬であるということが分かっているからである。

すべてを語り終えた後で、我々がとりあげている軍隊は何なのか、どのようにして維持すべきかを吟味することは不都合とは思えない。というのはこれらの紳士諸君は最初から王国を支配するほどの強大な軍隊についてずっと論じておられる。そして話しを大きくするために彼らはアイルランドやスコットランドまで話を進め、それらの王国の軍隊をくわしく調査している。しかしながら結局の所、彼らの計算はほとんど三分の一近く間違っている。手短かに言えば、彼らは数字を作り上げるために小さなものから大きなものまでを数え上げている。それに対して返答することは好都合である。

(21)

第一に、どれくらいの規模の軍隊がスコットランドとアイルランドで維持されているかはこの議論には全く当てはまらない。というのはそれらの両王国とも議会が承認しており、これらの紳士諸君はそうにはお考えではないようだが、その兵力が必要だと認められている。

第二に、もしも国王陛下が、我々が議論してきたようにそのような状況で即応戦力を保有しておくことが適切だと思われたとしても、我々の警戒心と恐怖感を取り除くために他の王国に同意を得て保有しておられる。自分たちの安全と満足に対する国王陛下の思いやりに対して、イングランド国民はなお一層感謝すべきではないか。

第三に、これらの紳士諸君はなぜ国王陛下がネーデルラント総督の地位を保有されていることに対して同様な反対をしないのか。その職権により彼はいつでも好きなときに、ネーデルラントから一万人から二万人を、海外で戦争が無いときに我々を隷属するために呼び寄せることができる。というのは、その軍隊の距離というのは我々にとって安全の保証にはならないように思われるからである。

話しを続けると、戦争が終わり、国王陛下は外国人の軍隊を解散され、騎兵と竜騎兵の他に国内で十個連隊を解散された。またほとんどが海外のスコットランド人からなる十二個連隊をアイルランドへ派遣され、そこで彼らを解散し、恐怖心を抱くほどでもなくなり、我々の安全の役にもたたないほど軍隊を大規模に縮小された。それにもかかわらず、

この軍隊は我々がひどく怯える不安の種であり、その結末は国民が奴隷化されると彼らは怯えている。

誰もこの軍隊を永続的なものにしようと試みたものもないし、なんの定員も規定されてない。しかし立派に釣り合いがとれ、資格があり、議会が必要とみなす軍隊は合法であろうし、必要に違いなく、危険なものにはなり得ない。そして我々は安心して国王陛下と議会に軍隊を委任できるだろう。議会は、安全で必要だと判断しないかぎり軍隊の保有には同意しないだろうし、国王陛下は議会が同意するもの以外の軍隊は要求されないであろう。したがって議会が同意する限りにおいて、我々が心配する必要があるだろうか。国王陛下が軍隊の処理について議会の議決に任せられるなら、軍隊を維持するか、解散するかは議会が決定し、この御代においては起こりそうにもないが、議会がその権力を失わない限り、将来の危険が生じることはない。

(22)

結論

私はこの論を終える前に、この著者らの人物とその意図について短い考察をしておきたい。またこの政府に反対する同様なパンフレットと、過去数年間の彼らの方法の経歴についても少しばかり考察してみたい。

国王陛下は戦時中に、より人目につかない彼らの行動の影響に気づかれた。彼らは資金と供給を遅らせ、計画を妨害した。彼らはそれを二年間続けて、戦争を延ばしたので、フランドルの軍隊にとって致命的となりそうなものであった。彼らは世界中の軍隊で（彼らの他には）例の無いほど長期間、給料の支払いもなかった。そして国王陛下に認識して頂きたいが、彼らは国王のために戦っていただけでなく、必要となれば国王のために飢えることさえ辞さなかった。そして次の議会の開会式での演説で国王陛下には是非彼らのことに言及して頂きたい。

(23)

これ以後、これらの紳士諸君は悪意を企て、そして常に、処理のまずさ、無能な士官、大臣、などについて町中に不平を言いふらした。自分たちが重用されないことに憤り、他の人々を嫉妬している。講和しなければならない、そうしなければ戦争によって破滅してしまうと叫び、現在彼らはひどく過小評価しているが、フランスの軍事力を誇張して、そ

してもし講和によって自国民を救えなければ、我が国はフランスの属国になってしまう、などなど。

最終的に、国王陛下は、彼らの期待や間違った解釈に反し、フランスを安全で名誉ある条件に同意させた。そして期待されていたばかりでなく切望されていた講和が獲得できた。

この講和が成立するとすぐに彼らは軍隊を解散させようと主張している。今となつては国王が国民を傷つけることがないように、国王の武装を解除しなければならない。そして子供や気の狂った人に持たせるような武器以外は与えてはならない。そして暴君から国民を守るために国家全体が武装を解き、同盟国は見捨て、全ての同盟国や（相互防衛と安全のために締結された）条約は放棄しなければならない。そして国王には自分自身の前提とする役割を実行出来なくさせなければならない。この目的を達成するためにパンフレットが出版された。そして国民の自由の擁護者と主張し、クラブを作り、公然と印刷物や講演で主張した。そして彼らはみな、きわめて不名誉なソツツィーニ派の異端の主張を信奉しているので、片方の手では神の子に挑戦し、もう一方の手では国王と政府に公然と反抗している。

(24)

そしてまた彼らの冒涇はその政策と密接な関係があり、彼らは二冊のソツツィーニ派の軍隊反対論をほとんど一緒に出版している。

ほとんど同時期に、同じ人々により、ラドロウ<sup>63</sup>の『日誌』二巻が世に出た。それらすべてにおいて議会の国王反対の行為は過度に誇張されている。オリヴァー・クロムウェル<sup>64</sup>という単独の人物による統治は目立たないようにひそかに反対されているが、一般的には、単独の人物による統治はことごとく反対され、すべて共和主義の原則が唱道され、弁護されている。

そしてこの種の仕事を多くかかえ、出版規制法令に対する恐れのもとで、彼らは出版の自由を擁護する本を出版することにより、その打撃を避けようと努力した。それを彼らはきわめて巧妙に実行したので法案は通過せず、彼らの恐怖も消滅した。

これは彼らが利用方法を知っていた勝利であり、すぐ後にシドニー大佐<sup>65</sup>の政府の行動原理が出版されたが、それはフィルマー卿<sup>66</sup>に対抗して書かれたものであった。このために著者は殉教者として死に、その出版社の一つはそれが世界で世に出たもので聖書の次に最高の著作であると厚かましくも述べた。

(25)

そして今度は同じ組織から『常備軍の歴史』が出版されたが、その中で偽りの情勢判断をさせ、遙か昔に放棄されているのに、独裁政治だとか専制的な政府だという叫びをあげさせるため、大臣を罵倒し、我が国の秩序をあざ笑い、国王を冷やかし、そして国民を恐怖に陥れるために世の中のあらゆる技巧が利用されている。

そしてそれは国王と国民の間の軋轢と不和の種をまく相当の力を持つ事になるかも知れない。これら二つの軍隊に対する攻撃は、ちょうど議会の開会<sup>67</sup>に合わせて出版され、きわめて熱心に販売されたので、ロンドンで出版される以前からイングランドから遠隔の諸国でも目にふれた。

これらの状況は少しでも世間の人々の目を見開かせ、国民の間に分裂の種をまくような輩には用心し、変化ばかり願っている人々には関わるべきではない、という教えとなることを願う。

そしてこの件は事実の適切な審判であり、我々の自由と安全のどちらにも常に非常に関心を払っている議会に任せることを希望する。

終わり

## あとがき

これは *A Brief Reply to the History of Standing Armies in England. With some Account of the Authors*, 1698 の翻訳である。(以下 *A Brief Reply* と呼ぶ。) テキストは京都大学大学院准教授高谷修氏より提供を受けた初版による。当時の習慣に従って著者名は記されていないが、Lois G. Schwoerer によると Daniel Defoe により 1698 年 11 月 25 日以後に出版されたとされている。Notes and Queries, October, 1966, p.388.

翻訳に際しては、P.N.Furbank ed., *Political and Economic Writings of Daniel Defoe, Vol. 1: Constitutional Theory*, Pickering & Chatto, London, 2000 を参考にした。(以下 *Political and Economic Writings* と呼ぶ。)

## 注

- 1 *A Short History of Standing Armies in England*, 1698. Lois G. Schwoerer によると John Trenchard による 1698 年 11 月 25 日出版とされている。Notes and Queries, October, 1966, p.387.

- 2 Daniel Defoe, *A Brief Reply*.
- 3 Strafford 1st Earl of (Thomas Wentworth)、ストラッフォード伯爵(1593-1641)：英国の政治家、チャールズ一世の補佐役として反動政策を推進、長期議会から弾劾され、処刑された。
- 4 William Noy もしくは Noye ノイ(1577-1634)。
- 5 Charles I チャールズ一世(1600-49)：英国王(1625-49)；スコットランド王ジェイムズ六世(後の英国王 ジェイムズ一世)の子；スコットランド失政から清教徒革命を引き起こし、処刑された。
- 6 P.N.Furbank によれば、デフォーが誰のことを念頭においていたかは不明である。  
*Political and Economic Writings*, p. 269.
- 7 Famianus Strada、ストラダ、*De Bello Belgico*(1632-47)の著者。
- 8 Guido Bentivoglio、ベンティポリオ、ボローニャの都市貴族。
- 9 Duke D'Alva: Ferdinando、Duke of Alva(1508-83)、アルバ公、スペイン領時代のネーデルラント総督。1567 年大軍を率いてネーデルラントに赴任、エフモント伯を含む多数の貴族・市民を処刑。
- 10 Don Lewis de Requesens ルイス・デ・レケセンス、アルバ公の後任ネーデルラント総督。
- 11 Groningen フローニンゲン：ネーデルラント北東部の都市。
- 12 Count Lodowick of Nassau または Ludwig ルートヴィヒ。1574 年モークの戦いで敗死。フリードリヒ・フォン・シラー作、友清理士訳、『オランダ独立史』、2005 年、ウェブ公表版、317 頁。
- 13 Harlem=Haarlem ハールレム、ネーデルラント北部の都市、1577 年オラニエ公ウィレム(1533-84)によってスペインより奪還された。
- 14 Mons モンス：ベルギーの都市。
- 15 Count D'Egmont Comte Lamoral、エフモント伯爵(1522-68)：フランドルの軍人・政治家。
- 16 Richard II リチャード二世(1367-1400)：イングランド王(1377-99)；エドワード三世の後継者で孫。
- 17 Queen Mary メアリー一世(1516-58)：イングランド・アイルランド女王(1553-58)；スペインのフィリップ二世の妻、ヘンリー八世の娘、新教徒を迫害し旧教会を復活。
- 18 Queen Elizabeth エリザベス一世(1533-1603)：イングランド女王(1558-1603)；メアリー一世の後継者；ヘンリー八世とアン・ブーリンとの娘；英国国教会を確立し、

スペインの無敵艦隊を破った。

- 19 Calais カレー：ドーバー海峡に臨み、英国に最も近いフランス北部の港市；1347 年イングランド王エドワード三世が占領したが、1558 年ギーズ公が奪回した。
- 20 Dunkirk ダンケルク：フランス北部の港市。クロムウェルがスペインより奪ったが1662 年にチャールズ二世がフランスへ売却。
- 21 Tilbury ティルベリ：ロンドン東郊、テムズ川に臨む港町。デフォーがタイル工場を作った場所。
- 22 Plimouth=Plymouth プリマス：イングランド デヴォン州南西部、イギリス海峡に臨む港市；海軍基地がある。
- 23 Cadiz カディス：スペイン南西部、大西洋に面したカディス湾に臨む港市；軍港。
- 24 Eight エイト（主としてスペイン領アメリカで流通した貨幣）。
- 25 James I ジェームズ一世：(1566-1625)：イングランドおよびアイルランド王(1603-25)；スコットランド王としてはジェームズ六世(1567-1625)；Mary Stuart の子；Stuart 朝の祖で王権神授説を信奉；欽定訳聖書を英訳発行させた。
- 26 Brill=Brielle ブリーレ、南ネーデルラントの港町。1585 年から 1616 年までイギリスに占領されていた。
- 27 Ramekins=Rammekens ラッメケンス。砦があった。ネーデルラント南西部、フリッシンゲンにある。
- 28 Flushing フリッシンゲン、フラッシング：ネーデルラント南西部、ワルヘレン島の港市；ネーデルラント独立戦争発端の地。
- 29 James II ジェームズ二世(1633-1701)。チャールズ一世の子；名誉革命中フランスに亡命。
- 30 *An Argument Shewing, That a Standing Army, with consent of Parliament, Is not Inconsistent with a Free Government, &c.*, 1698. デフォーの常備軍論争に関する第二作目のパンフレット。
- 31 Lewis the 14<sup>th</sup>=Louis XIV ルイ十四世(大王、太陽王)(1638-1715)：フランス王(1643-1715)。
- 32 Lyon リヨン；フランス中東部ローヌ県の県都。
- 33 Brisac=Breisacha ブライザハ。
- 34 Friburg=Freiburg フライブルク。
- 35 Philipsburgh フィリップスブルグ。
- 36 Aeth=Ath アト、ベルギーの都市。1667 年にルイ十四世に占領された。
- 37 Luxemburgh=Luxemburg ルクセンブルグ。

- 38 Charleroy シャルルロワ、ベルギー南西部の町。
- 39 Franche-Compte フランシュ・コンテ、1667 年および 1674 年にルイ十四世に占領されたが、最終的に 1678 年スペインからルイ十四世に割譲された。
- 40 Burgundy ブルゴーニュ、バーガンディー：フランス中東部の地方。
- 41 the King of Spain スペイン王カルロス二世 Carlos II(1661-1700)。
- 42 Flanders フランドル、フランダース：中世にヨーロッパ西部にあった北海に面した国。
- 43 Dundalk ダンドーク、アイルランド北東部の港町、1689 年アイルランドに上陸したショーンバーグ将軍が進軍を停止した町。
- 44 Henry VII ヘンリー七世(1457-1509)：イングランド王(1485-1509)。
- 45 Richard III リチャード三世(1452-85)：イングランド王(1483-85)；エドワード四世の弟。
- 46 Duke of Monmouth モンマス公：James Scott、Duke of(1649-85)：英国王チャールズ二世の庶子；ジェイムズ二世の王位をねらったが処刑された。
- 47 Prince of Orange オレンジ公ウィリアム。
- 48 Henry the 4<sup>th</sup> of France アンリ四世(1553-1610)。
- 49 the Iniskilling=Enniskillen エニスキレン、北アイルランドの地名。ジェイムズ二世に対抗しプロテスタントが死守した。
- 50 Piemont=Piemonte ピエモンテ、イタリア北西部の州。
- 51 Dryden, John、ドライデン(1631-1700)：英国の詩人・劇作家；桂冠詩人(1668-88)。
- 52 London-Derry ロンドンデリー：北アイルランドの港市；1688 年ルイ十四世に援助されたジェイムズ二世の軍に包囲され 105 日間死守した。
- 53 Duke Schomberge=Schomberg ショーンバーグ公爵(1615?-1690)、アイルランドのボインでの戦いで戦死。
- 54 Boyne ボイン川：アイルランド東部の川；1690 年ウィリアム三世が付近でジェイムズ二世軍を打破したボイン川の戦いで知られる。
- 55 Socinian Principles ソツィニー派の原理。その主張は三位一体をしりぞけ、イエス・キリストの父のみを神とするだけでなく、教会と国家の結合を否定し、国家は神の制定によらず、したがって国家の起こす戦争を正しいと認めることはできないとした。『世界大百科事典』平凡社。
- 56 Final=Finale Ligure フィナーレ・リーグル、イタリア北部、地中海沿岸の都市。当時はスペイン領。
- 57 Thoulon=Toulon ツーロン、フランスの地中海沿岸の軍港。

- 58 Duke of Savoy サヴォイ公。
- 59 Montferrat=Monferrato モンフェッラート、イタリア北部ピエモンテ州の一地域の名称、ピエモンテの南東。
- 60 the Palatinate プファルツ、パラティネート：ドイツ南西部、ライン川西岸の地域。
- 61 長女 Elizabeth Stuart の夫フリードリヒ五世が 1622 年、領地を失いネーデルラントへ亡命した。
- 62 Gustavus Adolphus グスタフ二世、グスタフ・アドルフ(1594-1632)：スウェーデン王(1611-32)；スウェーデンの国力を増大した国民的英雄。
- 63 Ludlow's *Memoires* ラドロウ、Edmund Ludlow (c. 1617 - 1692)の『日誌』、ラドロウはイングランドの国会議員。チャールズ一世処刑に関与。死後の 1698 年に亡命生活を送っていたスイスで出版された『日誌』で有名。
- 64 Oliver Cromwell(1599-1658)王政復古後、チャールズ二世により墓を暴かれ、遺体を吊された。トマス・フェアファックス卿とクロムウェルの関係を描いた映画 *To Kill a King*(2003)の冒頭場面にその情景が描かれている。
- 65 Coll. Sidney Algernon Sidney シドニー(1623-83)、英国の政治思想家、軍人、共和主義者。
- 66 Filmer Sir Robert ロバート・フィルマー卿(1589-1653)、英国の政治思想家、王権神授説を主張した。
- 67 1698 年の議会は 12 月 6 日に開会された。